

万次郎の世界展

龍馬の国際感覚に通じる

『漂異紀略』に見る



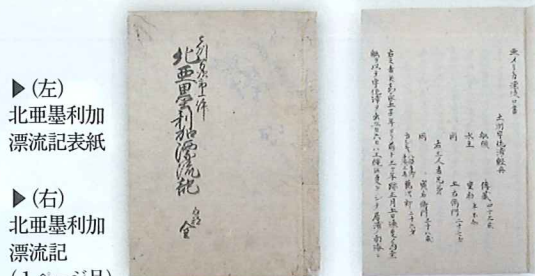
▲漂流譚表紙

▲漂流譚(1ページ目)



▶(左) 漂客談奇表紙

▶(右) 漂客談奇(1ページ目)



▶(左) 北亞墨利加漂流記表紙

▶(右) 北亞墨利加漂流記(1ページ目)



▶(左) 漂流記表紙

▶(右) 漂流記(1ページ目)



▲「漂異紀略」表紙



▲五右衛門



▲傳蔵



漁船で漂流し、アメリカ人に助けってもらった万次郎は、世界中の海を航海し、真の国際人となって、ペリー来航の1年半前に日本へ帰ってきた。

現在残っている『漂異紀略』の写本は、幕末当時に写されたものが6種類あると考えられている。その一つは、100年前の大正元年(1912)に海を越えてアメリカに伝わり、現在ではローゼンバック財団が所蔵している。ローゼンバック財団では、アメリカゴベスプッチが書いた『新大陸』も所蔵しており、こちらはヨーロッパにアメリカを紹介した最初の書籍と位置付けられている。そして、『漂異紀略』は、日本にアメリカを紹介した最初の書籍、と位置付けられており、『新大陸』に匹敵するほど非常に価値が高い。

万次郎が持ち帰ったアメリカ情報は、幕末の日本とアメリカにとって、現代では計り知れないくらい大きな価値を持っていた。そのため、『漂異紀略』は、多くの写本や派生本が作られ、幕府はもちろん、坂本龍馬や先進的な考えを持った幕末の人たちが、大いに参考とした。『漂異紀略』は、幕末国際情報の基礎資料であり、幕末日本の国際化を考える上で大変重要な資料である。

今回の展示では、ローゼンバック財団所蔵の『漂異紀略』を始め、可能な限り多くの写本や稿本、派生本を集め、内容の比較検討を行った上、それらがどのような経緯や目的で作られていったのかを明らかにしたい。

『漂異紀略』の成立状況を解明することによって、万次郎の漂流の足跡や意義を正しく理解し、幕末史研究に役立つ展示を行う。また、万次郎の国際交流は、現在でも学ぶべき点が多々あり、多くの方に知っていただきたい。



■ JR高知駅から高知県交通バス「桂浜」行、「龍馬記念館前」下車徒歩1分
 ■ 高速道高知インターから14km ■ 高知龍馬空港から16km